

Gustav Aubin ドイツ経済史における宗教改革の影響

Rede gehalten bei der Reformationsfeier der Vereinigten
Friedrichs-Universität Halle-Wittenberg am 31. Oktober 1929

吉 田 隆 訳

総長閣下！

尊敬する淑女、紳士諸兄

親愛なる同僚、学友諸君

経済国家学の代表者に、宗教改革を記念すべき日に皆さんにお話をする名誉が与えられるとすれば、とりわけ彼が歴史的な関心をもつ場合には、宗教改革がドイツの経済生活に及ぼした影響に考察を向けることが当然であります。『ドイツ経済史における宗教改革の影響』という、このテーマを選んだことは、ハレのように、その歴史においてこの影響の



グスタフ・オバン

結果をはっきりと感じとった町においては、また、彼の名前と彼の家族の歴史からつね日頃この関連を記憶している講演者にあつては、ますます当然であります。

しかしながら、人がドイツ国民全体とドイツ経済全体における外国のプロテスタント達の受容という事実にその考察を限定しようとするならば、それは問題の周辺にのみ言及することが肝心でしょう。この事実さえも、宗教改革と経済生活との間に生じた精神的な関連の検討に基づいて考察される場合にはじめて、究極のもっとも深い根拠において、その

著しい影響を把握することができるでありましょう。事情に精通した方は、この指摘が、その最初の体系的な論述と解明がマックス・ヴェーバー^[1]という偉大な名前に結びつけられるあの関連を狙うものであることをご存じであります¹⁾。ヴェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という当時において意表を突かれたような、驚くべき斬新で人をひきつける気持ちをおこさせた題名の一論文の中で、それまで対立する両極と見なされがちであった2つの現象の複合の局面を結びつける糸を発見してから丁度1/4世紀が経過しました²⁾。さまざまな学問の専門領域でたたかわれた活発な論争の結果、ヴェーバーの得た結論はその核心において確証されました³⁾。この命題に対して向けられた攻撃は、この命題の創始者自身が与えた形式に対して向けられたというよりも、この命題が熱烈ではありますが注意深く考慮しない信奉者の手に受け入れられた時にとった形式に対して向けられました。



マックス・ヴェーバー

このようにこのテーマは、もちろん、どうしても拡がらざるをえないので、その取扱いは、いうまでもなく重要な事柄に鋭く制限さ

れねばなりませんし、また粗っぽい図式化した取り扱いの危険、詳しい叙述に代えて、要点の指摘やもしくは警句を使用する危険が生じます。それは、聴き手が確実な判断と価値判断とを混同しがちなテーマの場合には二重に危険であります。そういうわけで、以下で述べることになる諸現象 — 相互に対立する個々の信仰であれ、経済発展の総過程の内部における資本主義的な経済形態であれ — の評価はもとより、それらの現代的な視角の評価といったことはまったく考えていないことを、とくに明白に強調しておきたいと思います。過去にもあったか、また今あるのか、ただ、事実を確定し、提示するだけであります。

キリスト教の世界と経済の世界との間に口を開けている固有の対立⁴⁾を克服することは、経済が初期中世のかんたんな仕組みの容易に見通しすることのできる状態から新しい豊富な形成物へと発展し始め、そのために教会の監督から抜け出す恐れが生じた時に、教会の一つの重要な課題として現れざるを得ませんでした。実際、中世の頂点であると同時に新しい世界の出発点を意味する13世紀に、教会はその最大の体系化であるトーマス・フォン・アキーノ^[2]の作品の中で、キリスト者の経済に対する関係にとって当然規定的であるべく、またその核心において今日でもカトリックの経済倫理の基礎を形づくっている教説を展開いたしました。トーマスは分業にもとづく人間の経済活動を究極において神に帰せられるべき自然的な生の秩序の流出として受け取りました。そしてそれによって社会的有機体内部の各部分労働に評価 (Würdigung und Wertschätzung) を与えることができたが、こうした評価は古典古代には知られていませんでした。しかしながら彼は、個人にとっても共同生活にとっても最高の目標として世俗外の、すなわちひたすら瞑想と禁欲に捧げられた修道僧の生活をあげることで、すべての世俗内の活動に低い評価を

押しつけたのでした。しかし現世にとどまる者に対しては、その誘惑、とりわけauri sacra fames「金銭の為に飢えること『金銭の欲は、すべての悪の根』(テモテへの手紙6章10節以下)」をできるだけ抑制しようとするような経済の組織が要求されました。このような組織についてトーマスが描いた姿は、外的な理由からも内的な理由からも当時イタリアにおいて発展し、やがてヨーロッパの経済的相貌を規定することになる都市経済の特徴をおびていました。すなわち、限られた一領域内において可能な限り自給すること、生産者と消費者との間の直接的な交易、それによる商業の広範な排除です。なぜなら、商業階級が、自分にふさわしい生計の充足に必要な程度を超えて営利を追求し、同時に、それによって欲情の罪に墮落する危険をもっとも多く冒すものであることを教会は鋭い眼で認識していたからでした。Jesus Sirach^[3]の言葉のように『商人は不正すれすれ、雑貨商は罪すれすれにふるまうことができる…釘が2つの石の間の壁の中に刺さっているように罪もまた購買と販売の間に刺さっている。』このような危険を避けるために、トーマスは公定価格の教説を展開し、利子の取得と一切の高利貸業を禁止し、その際に高利の概念を、今日の経済的な財貨の移転の大部分の形態がその中に含まれてしまうほど拡大したのでした。教会はこの命題を採用することで、教会の意のままになるさまざまな権力手段をもって安定化をはかり、とりわけ価格規定と利子および高利の諸問題を告解聴聞席の範囲 (Forum) に引き出すことによって、教会に隷属する者の経済生活を超越的な最終目的と一致させる期待にふけたのでした。

しかし、時代は当然、次のことを明らかにしたのでした。すなわちトーマスの教義と彼以後の教会学説が定式化された時にはすでに、こうした教説に照応していた経済状態は経済的先進地域ではすでに乗り越えられてお

り、それに続いてその他の地域でも乗り越えられていったのでした。周知のようにローマ教皇庁自身が極めて強い利害関係をもっていた普及しつつある貨幣・信用経済の必要、拡張しつつある卸商業の必要が、これを束縛することに抵抗しました。教会はこの勢いから逃れることができませんでした。ドゥンス・スコトゥス (Duns Scotus)^[4] の場合のようにトーマスに意識的に対立して^[5]、あるいはトーマスの教説の基礎に横たわっているある種の可能性に結びつけて、後期スコラ学は^[6]、あれこれ考えた末に仕上げられた詭弁論を通して、厳格な教義の緩和と経済生活の要求に対するある種の適応に到りました⁵⁾。しかしその際、原則的には教会の厳格な教説は常に維持されていました。たとえば、この時代、唯一の、固有の企業家類型である後期中世商人の経済生活は、永遠の滅びの深淵が左右に迫る狭い尾根を歩くようなものでした。この立場が、それによって彼の生活に持ち込まれた内面的な葛藤をかかえるものとして感じ、またその下に悩んだということは、何らかの種類の寄進 (Stiftungen)^[7] によって遺贈者が、在世中の彼の経済活動を通じて良心に反して行った罪に対する許しを保証するものとされていた、繰り返し記されていた遺言の規定がこれを示しています。

宗教改革の事業が起こった世界は極度の精神的緊張に充ちていたばかりでなく、また極度の経済的緊張にも充ちていました⁶⁾。ドイツでは初期資本主義が力強く現れました。ドイツの山中に豊かに埋蔵されていた鉱産物に支えられて、貨幣・信用経済が急速に拡がりました。西部と南部の古い商業都市には大財産が蓄積され、商業資本は工業生産に手をのばし、都市の手工業者や部分的にはすでに農家の家内工業をも自己に従属させはじめました。増大しつつある富および取引関係の拡大と平行して、多くの階層において豪華な生活が発達し、舶来品の消費が急速に増加しました。

我々は今日、振り返ってこの時代に、ドイツ経済が南ヨーロッパと西ヨーロッパのより古い経済勢力に急速に接近し始めたところのドイツ経済の最初の偉大な繁栄時代を認めようとしがちであります。しかし同時代の者はこの繁栄期について違った判断を下していません。広範な国民経済的関連を洞察する訓練を受けずに、彼らは彼らの判断に際して、顧慮することのない利潤追求と生活の享樂の多様な弊害 (Auswuchse) および経済の構造変動に常に必ず伴う烈しい社会的緊張に拘泥したのでした。彼らはとりわけ、この破滅的無法の代表者として現れた商人に対して彼らの憎しみを投げつけ、商人の独占的な企図に、いっそう著しい貴金属の流通と信用支払いの手段の完成の結果にすぎない著しい価格高騰の責任をも押しつけたのでした。こうした判断において人文主義者、なかでもエラスムス^[8]とフッテン^[9]は、古典古代の史料の誤った評価によって迷わされて広範な民衆とも貴族とも対立しました。というのは、民衆も貴族も動産資本の力が急速に増大するなか、彼らの経済的、社会的地位を脅かされていると考えていたからです。



エラスムス

経済生活の諸問題に対するルター^[10]の立場を理解しようと思うならば、ルターが成長し、生活したところのこうした時代の思潮と農民的小ブルジョア的環境 (Umwelt) を計算に入れなければならないでありましょう⁷⁾。しかしながら、ルターの宗教的な根本的態度 (Grundhaltung) がはるかに重要であります。それは無条件に、彼の時代の教会の決議論の方便に満足することができず、その背後にさらに、経済倫理を束縛する点でキリスト教的道徳にのみ照応するとルターに思われた盛期中世のより厳格な教説を捕らえたのでした。こうして、キリスト者の経済生活の形成

(Gestaltung) に対するルターの要求はトーマス主義のそれと相当な程度大幅に一致しております。伝統的な欲求充足の原理によって支配された・できる限りの自己充足的な都市経済に対する同じような愛好、商業と商人層に対する同じような不信、利子と高利の問題



マルチン・ルター

に対する同じような態度は、いずれも両者に共通しています。したがってここでもまた、経済生活の光に向かう新しい形態に対する対立があるのです。^[11]

しかし一つの中心的な点において、ルターはこれまでの教会の教義を超えて、実際そしてとりわけ人間の経済活動が属する自然的生活秩序のとらわれぬ評価の方向に踏み出していました⁸⁾。それは職業に関する彼の教説に見られます。彼は、現世から隠遁し、孤立して永遠の救済を得ようとして日を送ることが人間の最高の職業であるという考えを断乎として斥けました。彼は聖職階級(Mönchsstand)を否認し、それによって、世俗内的職業の評価を、それよりもいっそう高い職業階級を認めることによって当然その上にかかる圧迫から解放しました。人間はそもそも現世に生きて、現世を内面的に克服しようと努めるべきであり、パウロの言葉にしたがって、彼が現世をもたなかったかのように、現世をもつべきものであります。こうした現世の克服の最も重要な手段になるのが労働であります。すなわち神の意志で携わることになった職業に精励してその義務を果たすことが礼拝なのです。彼の職業に全力を尽くして没頭するキリスト者は、それによって現世に夢中になることなく、こうして分業的職業の秩序の創出の中に啓示され、彼自身それに奉仕すべき神の愛に対する証を果たすのです。というのは、ルターの見解によれば、労働する人間は他人に対しても自分自身に対しても多くのもの

のを創り出すからです。ルターが、かつて述べたように⁹⁾、「大工は彼自身が建てた一軒と引きかえに、100軒も、それ以上の家を建てる。農民は彼の畑を自分自身以上に他の人のために耕す。このように仕立屋と靴屋は自分自身よりも他人のためにより多く洋服や靴をつくる。」のです。

このような世俗的職業観をもって、ルターは、その倫理的意義はまったく別としても、大きな実践的影響をも持つことになりえた1つの教説を述べたのでした。この影響の一部はすでにルタートウムの中に見ることができます。今や各人一人一人に向けられた祈りかつ働きという呼びかけ(Apell)は、宗教的感情(religiöser Aufgeschlossenheit)の旺盛な時代には、反響を呼ばぬことはありませんでした。ただそれと並んで次の点が指摘されるべきでしょう。すなわち、こうして何万の人々が規則的労働に就くのを妨げていたカトリックの社会秩序の托鉢制に対しても宣告が下されたということです。プロテスタンティズムに帰依した帝国諸都市の救貧条例、後にはドイツ諸領邦の救貧条例もまた全力をつくしてこれを目ざし、こうして職業活動に従事する者の数を増加させました。しかしながら、プロテスタント教会のルター派内部の新しい職業教説は十分な成果をあげるに至りませんでした。恐らく、ルター派の支配的な諸国の素朴な経済状態から出た諸影響のほかに、すでに年老いつつあるルターに独自の、また教会の次の世代においていっそう強くなった著しい伝統主義的・保守的特徴がこれに対立したのでした。働きという呼びかけは、この労働が捧げられるべき目標の中に限界を見出しました。そしてルタートウムは盛期中世と同様に、伝統的・身分相応な欲求充足のなかに、しかも神の摂理によって編み込まれた内部にこの目標を見たのでした。ルター派の教会がその信奉者の世俗的生活を、したがってまたその職業労働を厳格な教会戒律で

統制することを断念したことは、その教説の内面に向けられた本質に完全に照応していましたが、そのことはまた、世俗の事柄に対する消極的態度と受け身の従順性という同じ特徴をも示しています。そして、この特徴がルター派の教会をしてその信奉者の経済生活の指導をますます国家の手に委ねさせることになりました。ルター派の教会はこうして、17, 18世紀の絶対主義的領邦国家の経済政策の1つの強固な支柱になったのですが、しかし、領邦国家がその経済に強い刺激を及ぼそうとした所では、国家はしばしばカルヴァンの要素にいかにか頼っていたかということを注意しなければなりません。

というのは、プロテスタント教会のうち、何らかの意味でカルヴァンから出発したか、もしくは、カルヴィニストの精神から決定的な刺激を経験した宗派の内部において、教会の教説は、一部分は意欲された、しかし大部分は意欲されない結果 (Auswirkung) において、その教説を信奉した民衆 (Volkskreise) の経済生活にとって、ルタートウムがその信者の経済的エネルギーを喚起させえたところをはるかに超えた意義を獲得したからです。いずれにしろ、この関連を辿るならば、カルヴァンの本格的な思想が彼自身の教会において、また別してイギリスとアメリカの地で発展したピューリタニズムの諸宗派においてはじめて経験した巨大な転換をつねに意識しなければならいでしょう。17, 18世紀の教説と思想をそのままそっくり16世紀のカルヴァントウムに投影することは警戒しなければならないでしょう。もっとも、この時代に内的、外的な諸条件の影響の下でたとえ常に直線的ではなかったとしても、いっそうの発展を可能にした出発点が、すでにカルヴァンのうちに確固として存在していたことを見誤ることはできないでしょう。

カルヴァン^[12]は、ルターのように修道士生

活を貫いて成長したのではなく、法学の厳密に論理的な訓練を通して成長したのです。カルヴァンは、ルターのようにほぼ完全に農業的環境の中で生活したのではなく、周囲をすべて外国の領土に厳しくとり囲まれた商工業を唯一の経済的基礎とする小都市共和国の中で生活したのです。それゆえカルヴァンは、最初から経済活動のこれら商工業の両部門に対して、ルターとはまったく違った評価を示したのです。ルターにとっては、ほとんど神秘的ともいえるほどに思慮された農耕が、つねに、最も重要な生産部門であったのです。この点は利子問題に対するカルヴァンの立場にも表われています。カルヴァンはすでに利子徴収を無条件に認めていたと言おうとするなら、それは確かに言いすぎでしょう¹⁰⁾。彼は利子の徴収を明らかにしていますが、なおさまざまな保留をつけて回避しています。しかしカルヴァンの根本的態度は、この問題においてルターの態度より完全に肯定的でした。そして17世紀にカルヴィニストの精神で充たされたオランダにおいて、Hugo Grotius^[13] や Salmasius^[14] のようにはじめて利子の経済的・道徳的な根拠 (Berechtigung) を明らかにした人々が現れたことは決して偶然ではありません。



ジャン・カルヴァン

しかしながら、全体的に見れば、それは外面的な事柄 (Außendinge) にすぎません。決定的に重要なことは次の点です。すなわち、カルヴィニズムは、まさしくルターに特徴的なキリスト者は、彼の信仰を通して神の定め給うた職業における誠実な義務の遂行に関わるべきであるという思想を引き継ぎ、カルヴァン独自の厳格な論理と強烈な活動性をもってこれを仕上げたことは決定的に重要であったのです。カルヴァンは信者に向かって個々の労働のすべてにおいて、神の名誉と栄

光を増すことに仕え、全生活を絶え間ない良き仕事の連鎖の中に解きほぐし、それによって聖化するような生活実践を要求しました。キリスト者は彼の信仰を良き仕事において確証しなければなりません。この要求はカルヴィニストの教説の他の一面によって強化されました。厳格な予定説の思想^[15]にしたがって、すべての信者にとって、彼が神に選ばれた者に属するか、それとも永劫の罰を受けた者に属するかということが、最も重要な関心事 (Sorge) になりました。個人は神による選定の確証をどこから獲得しうるのかという、教会との奉仕者 (Diener) に向けられた気がかりな問いに対して、Theodor Beza^[16] 以来、教義 (Dogmatik) と司牧 (Seelsorge)



テオドール・ベザ

は次のように答えます。すなわち、確証は恩寵 (Gnadenstandes) の状態の微表としての良き業から生ずると。こうして今やカルヴァン主義の教説の信者の世俗生活は、2つの側面から恒常的な圧

迫の下に置かれ、個人は彼の生涯の組織的な自己統制にされました。厳格に統制される教会規則が後押ししました。信者の世俗的生活は、その現実的一貫性において救いを得る (Seligwerdung) という非合理的な理念のための全生活の徹底的な合理化に向かって進みました¹¹⁾。カトリック教が修道士制度に具体化された世俗外禁欲のみを知っていたのに対して、ルタートウムにおいては世俗内における禁欲の思想が十分に示唆されてはいたが、それ以上追求されてはいなかったのに対して、カルヴィニズムは徐々に発展するにつれて、世俗的禁欲の思想を完全に発展させました。それは、詳しくは、今日でも新教徒の強烈さをこめて次の言葉を想起させる生活理想の樹立を意味しました。すなわち生活の大小の喜びに対する断念ですが、ルタートウムはこれを各人の自由に委ね、開放的に見做した

のですが、カルヴィニズムは装飾と華美に対する断念、快適で贅沢な生活に対する断念、あらゆる安逸と感情的な瞑想、それどころか一切の無用の会話の拒否。不労所得に基づく一切の地代消費 (Rentenverzehres) の否認。他面において、休みなき労働と義務の遂行による生活充足への要求を意味しました。

それは、何かを目指すことなく、その現実的影響作用において、経済の著しい興隆を必然的に伴わざるを得ない1つの経済倫理というものでした。この経済倫理は一方では消費を狭い限界の中に保持することによって、他方では労働の強度を著しく高めたことによって急速な資本増大へ導かずにはおかず、それは再び生産に役立ちました。その上、この教説は、古い教義、トーマス主義、ルタートウムが人間の経済はそれぞれの身分的立場に従って段階づけられた彼らの生活の糧を獲得するためにのみ認められるべきだと要求した場合に、そうした古い諸教義に含まれていた経済活動の、かの限界を抑制することができなかったのです。利潤追求は、道徳的に非難されないやり方で行われる限り根本的に制限されませんでした。なぜなら聖徒の生活の中では、利潤と富は、贅沢な消費や道徳的に疑わしい不労所得者 (Rentnertum) のためになったのではなく、隣人愛の活動に向けられた相当な金額を差引いて、再び経済的生産に用いられたからです。これは、ルタートウムの伝統主義的な態度に対して著しい相違を意味しました。また人間は神の定め給うた職業にいつまでも辛抱するべきであるというルタートウムの思想もカルヴィニズムとは無縁でした。反対に、カルヴィニズムの教説によれば、別な立場において彼の諸力をいっそう発揚し、より大きな経済的利益を獲得することができる可能性を断念することは、人間の全生活は神の栄光を増すために定められて根本的要求に対する違反を含むこともありえたのでした。こうして改革派の教会の信奉者た

ちは経済的に、より活動的になり、より適応能力に富むものとなり、カトリック教とルターウムが、人間の永遠の救いは、一面的に設けられた諸関係だけでなく、純粹に靜態的な経済においても確証されうると考えたがゆえに創りだした諸束縛から解放されていました。カルヴィニズムとその諸分派は—ここで我々は差異の核心に迫るのですが—経済のある特定の歴史的な發展段階を宗教的な命令によって謂わば永遠化することを断念したのでした。カルヴィニズムは、人口増加および生産と分配の拡大を求める必要からだけでも明らかになるに違いない経済的な組織形態のいっそうの發展の必然性を暗黙のうちに承認したのでした。カルヴィニズムは、その倫理的諸原則によって人間の魂の救済を経済の変化しつつある諸形態の中においても確証することを確信したがゆえに、それをするのができたのでした。こうして、先行する2つの宗教においては、根本的に解決にされず、経済のある特定の歴史的段階のみに優和されたにすぎなかった、信仰の世界と経済の世界との間の二律背反を完全に根本的に解決しようという大がかりな試みが始めて着手されました。現世における休みなき経済的労働こそが信仰と救済に対する確信を確証する試金石であると考えることによって。

カルヴァンの信徒たちを経済的活動へと駆り立てたところの宗教的分野（Sphäre）からの衝撃には、歴史的環境から生じた、これに劣らず強烈な衝撃が加わりました。カルヴィニズムの成立した西ヨーロッパのほとんど至る所では、カルヴァン信徒は、国家権力によって公職から閉め出され、さらに自分たちの職業選択においても閉め出しや制限に出会いました。経済の世界だけが彼らに自由に開かれ、経済の世界が彼らの力を自由に喚起することのできた分野でした。この排除は、最初はまさしくイギリス国教徒の様々な形態に妥当しました。彼らにとってしばしばヨー

ロッパの諸事情は明らかに狭すぎると考えられ、新世界への移住によって彼らに課せられた圧迫から逃れようとしてしました。キューカー^[17]教徒と彼らの指導者ウィリアム・ペンの名前は、これらの人々の中でもっとも明白に、後代の記憶に留められています。

こうして、我々はすぐに、カルヴィニストおよびプロテスタント諸信団の所属者が許されたすべての国において、彼等が経済生活において指導的な役割を果たしたのを見て、経済的發展の担い手と認めることは明らかになります。スペイン人が烈しい羨望の念をこめて「異端が商業精神を促進する」と述べたのはいわれのないことではありません^[12]。実際、敬虔派の思想界、したがってルター派教会内部の集団形成に及ぼしたカルヴィニズムの影響は、敬虔派の中においても純粹ルター派の環境の中におけるよりもいっそう強烈な経済的エネルギーを奮い立たせたのでした。ヴッパータールの敬虔派^[18]とヘルンフォート信団^[19]とは、この点に関する周知の実例であります^[13]。

カルヴィニストに特有な経済精神が極度に明白な特徴は、イギリスおよび特にアメリカの地におけるピューリタン諸信団の内部においてであります。ここでは勿論しばしばその出发点からはるかに隔たり、そしてそれに対立していたこともありました。ここでは人間に対立する経済の完全な客観化、醒めた計算性をともなう生活の貫徹、あらゆる機会を見逃さぬかの営業精神が發展し、これはアメリカ人の経済生活の、さらに近代資本主義の1基礎となりました^[14]。このような極端は、それがアメリカから水上の道を発見する以前には、ヨーロッパの地盤にとって一般に無縁でありました。しかし、こうした制限にも拘わらず、我々は、ヨーロッパ文化圏にとってもプロテスタンティズムの経済倫理が、上述の我々の解釈する意味において、他の要素と並

んで、近代の経済秩序とその中に支配する精神の1つの重要な構成要素となっていることを見逃してはなりません。それは、職業への休みなき献身と生活の合理化という思想を創造したのでした。この思想は宗教的繁留が大部分の人間にとって深い意味を消失してしまったのちにも維持され、今日でもなお近代的経済の世界を支配しております。

お話しているうちに、内容の点では我々の根本的考察の限界に、空間的にはドイツの境界を越えたところに来てしまいました。ここでもう一度本来のテーマに振り返って、宗教改革がドイツの人の経済生活に及ぼした直接の歴史的影響を跡づけることにしましょう。他の諸民族に対するドイツ人の経済の発展程度に応じて、そしてプロテスタントの信仰の2大部門のドイツでの分布に応じて、これらの影響は、古くから定住していた人々の経済的エネルギーの浮揚力(Auftrieb)の中には余り存在していませんでした。たとえ、これが完全には欠けておらず、色々な形式で、様々な程度で外国のプロテスタントの受容から発する影響の中に存在したとしても。この事象の中に調整されつつある歴史的正義(Gerechtigkeit)を認めることができるでしょう。ドイツは宗教改革の母国でした。この母国は現世の宗教的運動に対するその関与を重大な信仰の分裂をもって支払い、烈しい決戦の場になったのであります。しかし、ドイツはまた再びその門を開いて受け入れた外国のプロテスタントの要素から―彼らはドイツ人に豊かな経済の知識と並んで道徳的才能(Tüchtigkeit)と移民者の経済的エネルギーをもたらし―豊かな祝福(Segen)を受け取り、そればかりか、これによって、30年戦争がたしかに創り出しはしませんでした。が運命を定めたその経済生活の著しい衰退からの向上を見出しました。

ドイツへのプロテスタントの移住には、比較的弱い鎖の連環によって相互に結ばれてい

る2つの局面が見られます。すべてではないにしても主としてスペイン領ネーデルランドからの16世紀の移住と、1685年のナントの勅令^[20]の廃止後に祖国を去ったフランスのユグノー^[21]の移住であります。前者は主としてドイツの西部に、後者は中部と東部に到達しました。ヨーロッパの文化的落差の方向に沿って西から東に進むこうした大きな移住者の行進に対して、たとえばベーメンやポーランドのような文化的水準のより低い地域からの移住は完全に後退しております¹⁵⁾。

移住は、いうまでもなく、ドイツのすべての地域に均等に行われたものではありませんでした。カトリックの地域はこれに対して明白に最初から彼らの移住を閉めだしていました。もし、アーヘンやケルンのような個々のカトリックの都市がプロテスタントを最初市壁内に受け入れたとしても、これらの都市は、内外の圧力の下でまもなく厳しい政策に移行して、来住者に対して、移住の旅を続けて市内から出ることを強制しなければなりません。ルターの教説に好意的な帝国諸貴族も改革派の移住者に対してきわめて冷淡な態度をとったのがしばしばでした。とりわけ、アウクスブルクやニュールンベルクやウルムのような多数の大帝国都市が、信仰上の理由からか経済上の理由からか疑問の余地はありますが、移住者の立ち入りを完全に禁止したわけではないにしても、制限したことはなによりも重要な意味をもつことになりました。

こうして第1期の移住は、主として、ライン河とその支流の流域に連なる3つの地域に集中しました¹⁶⁾。すなわち、Jülich、Cleve、Mörs、Bergといったライン下流域のプロテスタント諸領邦においてです。次にライン中流域とマイン下流域で、ここではフランクフルトとファルツ領が移住の望まれた目標でした。最後に、エルザス地方を通して第2の地域とゆるく関係していますが、スイスの

うちプロテスタンティズムに改心した諸州（Kantonen）と諸都市です。3つの地域の地理的な位置は移住者の国籍にも照応していました。ライン下流域ではほとんどスペイン領ネーデルランドからの移住者のみを見出しますが、ライン中流域とフランクフルトではすでに北フランスと東フランスからの移住者が加わり、スイスは南フランスとイタリアからの移住者に特別な吸引力を及ぼしたのです¹⁷⁾。すでに1525年直後にフリースランド^[22]とライン下流域への最初の移住が行われましたが、移住者の増大につれてカトリック諸国とりわけスペインとフランスがプロテスタントの教説の圧迫を真剣に取りくみました。政治的ならびに軍事的事件の進行は移住者の数から明らかに読みとることができます。なによりもアルバ公^[23]のネーデルラント到着、アントウェルペンの第1次略奪、スペイン軍によるその最終的占領は、移住者の流れをその都度に増大させる事件だったのです。しかし、最初の空間的分布は最終的な分布ではありませんでした。領邦君主の信仰の変化、個々の帝国諸貴族の信仰政策の交替、戦争と略奪が更なる移動をもたらしました。たとえば、プファルツとエルザスのプロテスタント達は30年戦争中に、しばしば、中立的なバーゼルの保護を求め、バーゼルは今日でもなおお茶会しているパトリチア的都市貴族の一部をこの当時獲得したのです。ついでルイ14世の侵略戦争は、その時プファルツ住民を新たに根無し草にし、17世紀末に大勢の新旧市民を領外からとりわけブランデンブルク・プロイセンへと向かわせたのです。中部ドイツ諸都市にみられるファルツ人やマンハイム人の来住したいわゆるコロニーが、ハレもそうですが、多数の、ドイツ系オランダ人、ワロン人、フランス人の名前を提示していることは、これを明らかにしています^[24]。

移住者たち、とくにアントウェルペンからとスペイン領ネーデルランドの南部諸州すな

わちトゥルネーからアラスにかけての地方からの移住者たちの出身した経済領域は、工業の製品の品質と多様性においても、また、同様に重要であります。手工業の代わりにすでに前貸を行っていたという生産の資本主義的組織においても、ドイツ経済にはるかにまざっていました。新しい工業の導入、それどころか新しい労働方法の転用（Übertragung）さえも、熟練労働者の入国によってのみ可能であった純粋に経験的な技術の時代にあっては、これらのプロテスタントの人たちの受容は工業の大規模な移植を意味しましたし、またドイツの経済生活を著しく豊富にしました。2、3の例を取り出してこの主張を証明してみましょう。クレフェルト絹工業の創設者はオランダのメノニート^[25]たちでした¹⁸⁾。いわゆるバルメン製品（飾り紐、組糸、レース）の製造は、アントウェルペンの縁飾り製造業者に起因します。近隣のゾーリンゲンでは、本来の刀鍛冶業は、最初ケルンに定住したパリのArmuriers（鉄砲製造業者）によって導入されました。南部の地域からは次の点を指摘しておきましょう。すなわち、チューリヒとバーゼルの絹織物工業はいわゆるロカルナ人^[26]、つまりイタリアのプロテスタントたちによって創始されましたし、バーゼルからのちの時代に更に南シュワルトワルトが工業化され、同様に有名なジュネーブのAdor家の子孫は18世紀にプ



ロカルノの亡命者

フォルツハイムの宝石業をふたたび起こしたのでした。ハナウの宝石・貴金属業の成立は、プロテスタント来住者に起因しています。フランクフルト、ハナウ、フランケン

タール、ヴェーゼルおよびハンプルクの絹織業は、ネーデルランドのプロテスタントによって創始されたのです。また彼らによって、マイセン、ケムニッツ、グリンマ、ゲラ、グライツなどのザクセン繊維地帯の毛織物工

業もまた決定的な刺激と新しい生産設備を獲得しました¹⁹⁾。

移民の多面的な経済的影響は、信仰政策が様々に動揺したのち、改革派の来住者をも寛容することになったフランクフルト・アム・マイン²⁰⁾のような町（*Gemeinwesen*）においてもっとも明瞭になります。フランクフルトは常に経済的な意味で重要な都市でありましたが、以前には自己生産は市壁内で行われる大市商業の後塵を拝していました。今では羊毛や絹や混織の盛んな繊維工業と良質の皮革業を獲得しました。アントウェルペンから受け入れたダイヤモンド研磨業も開花しました。また小売業においても新しい現象が現れました。菓子製造人、原料商、帽子商、ツングの小売商のこれまでの一切の条例に反して、その商品を加工した原料に従ってではなく、提供する必要に従って編成された流行品や装身具などの小間物業がそうです。しかしとりわけ来住者はかつての故郷との「取引」関係を利用し尽くして、フランクフルトの卸売業を発達させ、フランクフルトの貨幣取引をまさしく独自に創始したのでした。アントウェルペン出身のヨハン・フォン・ボデック（Johann von Bodeck 1555-1631）は最初のフランクフルトの大銀行家ですが、彼と彼の後継者たち — その中にはアントン・エルペンのルター派が多数います — によって、フランクフルトはドイツ最大の貨幣取引の中心地になりました。もちろんフランクフルトの発展は、新しい工業の浸透や資本主義的企業形態の出現がもたらした社会的緊張をも示しています。これまで許されていた数以上の職人を使うことを認めよという来住した仕事仲間の要望に対して、フランクフルトの皮革工がこれを「カルヴィニスト流の図々しい要求」と呼んだのは、広範な民衆に照応したものでした。

移住の第1期の影響を全体的に概観すると、

それは新しい工業と組織方法によるドイツの経済生活の富裕化のほかに、ドイツの各地域の経済的意義の変動（*Verschiebung*）をも引き起こしました。この変動は以後、時とともに当然一層鋭く現れました。カトリックの地域はしだいに停滞し逆戻りをし始めます。工業の旧中心地、移住者に門を閉じ、閉め出しを食わした大きな帝国都市も同様です。それらに代わって新しい、これまでほとんど注目されていなかった新しい地域が活発な工業活動の中心地として現れました。17世紀のドイツ経済の深刻な沈滞期間中にその地位を維持したばかりか、部分的に拡張することもできた3つの都市のなかで、フランクフルトとハンブルクはこの結果を決定的に外国人の来住に負っておりました。ライプチヒの場合は²¹⁾、外国からのある程度の来住はありましたが、別の原因がもっと重要な役割を演じておりました。これに対して、かつてドイツ最大の都市であったケルンは、深い眠りに落ちこみます。

移民の第2の大波は、ルイ14世が1685年に、90年間にわたってフランスのユグノーに彼らの信仰の実践を保証してきたナントの勅令を廃止し、それによって、まさしくコルベールの天才的な指導のお陰で新たな繁栄に向かっていたフランス経済から、その最良の力の一部を奪った時におきました。当時フランスに背を向けて、フランス人の経済方法の知識とカルヴィニストの経済精神とを外国に広めた25万ないし30万のユグノーに比して、大選帝侯とその後継者がブランデルク・プロイセンのために獲得することのできた約2万人の頭脳集団は、一見僅少であるといえましょう。しかしこの数は彼らが今や内部に受け入れた国の事情に対しては重要であります。

新しい植民地域にあったブランデンブルク・プロイセンは、つねに農業的構造の優越したきわめて貧しい国であって、都市と都市

工業の発達が遅れ、日常の必要のみをなんとか充足できる有様でした。30年戦争は、この国にほとんど底知れぬ破滅の淵に追いこみました。1680年によくプロイセンに帰属した中部ドイツの諸都市、とりわけマールブルクとハレも大きな被害を受けました。それはまさしく、大選帝侯が鋭い眼をもち、信仰上の争いを超えた所に立って、ナントの勅令の廃止に対して、追放された人々に彼の国を開放するポツダム勅令をもって答えた時、そしてさらに選帝侯が予期された移住者の群れの行進を自国にひきつけるために、ただちにあらゆる処置をとった時に、それはまさしくこの国の経済的発展における転換点を意味しました。実際、我々はその首尾がよくいった成果をみたのです。

我々がここで信仰上の亡命者の経済的影響を個々に跡づけようとするならば、それはすでに述べたことの繰り返しになります。ただ、その影響を正しく評価しようとするなら、次の点を忘れてはならないでしょう。すなわち、当時はヨーロッパの経済的発展の最下位の1つに沈んでいた国、そして今や一挙に、農業と工業に対する刺激の横溢、熟練労働者、練達の企業家および当時としてはもっとも進歩した工業生産の組織形態であるマニュファクチャーを保有するに至った国において、ユグノーの受入れが何を意味したのか、ということであります。プロイセンの多数の都市、たとえばベルリンやマールブルクの歴史において、ユグノーの受入れは新たな発展期の開始を意味しています。もっともハレでは、小さな飛地の南端という都市の危険にさらされた位置と有力なライプチヒに近いということが、まさしく大企業家にやがて再び次の移住をひきおこしたのです。しかし、ユグノーによって創始されたかもしくは発展させられた繊維工業部門や典型的なユグノー工業である光沢のある革手袋製造は18世紀のハレの経済生活において、著しい役割を演じており

ます²²⁾。

ここでもまた、社会的緊張と摩擦が事欠きませんでした。外国人が占めた特権的な地位、彼らがもたらした新しい工業、彼等の生産の資本主義的な形態は同様には土着の人々の羨望と嫌悪を促さざるを得なかったのです。宗教によって重荷を負わされることのない、ナイーブで激情的なドイツ人と、いつも黒衣を着て謹厳で信仰に凝りかたまつたユグノーとの間の生活様式の著しい相違がこれに加わりました。ユグノーは無心で俗世間の生活に(Leben)に對することがずっと少なく、さらに経済活動を宗教的まじめさで貫き通すことを試みたのです。まさしくハレの史料の中には、これら2種類の信仰の深い対立を電光のように照らす2つとない小史が伝えられております²³⁾。ある繊維マニュファクチャーのフランス人所有者が、単調な労働を歌によって緩和しようという習慣をもったドイツ人労働者を雇いました。Jaques Prévostは彼らに歌を禁止しました。その結果、争いがおこり、王の耳にまで達しました。そして選帝侯フリードリッヒ3世の英知はソロモン^[27]の判決を見出したのでした。即ち労働者は作業中歌ってもよい、但し讚美歌(geistliche Lieder)に限られる、と。

他のドイツの諸領邦も、この時ユグノーの流れの1小部分を領内にひき入れることに成功しました。偉大なブランデンブルクの従兄弟の手本にならって、例えばフランケン地方のホーエンツォレルン家は注目すべき救貧政策と工業化政策を推し進めたのでした²⁴⁾。エアランゲンをご存知の方は、この都市の全体の姿が今日でもなお、いかに明瞭にそのことを証明しているか知っています。しかし、すべては、ドイツ経済とドイツの歴史 — と、我々は付け加えましょう — そのより一層の発展にとって、次の事実のもつ重要性に對してあとすざりしております。すなわち、これ

まで完全に農業的な性格を持っていたプロイセンがユグノーの受入れによってその性格を緩和したこと、また、それによって18世紀のプロイセンの支配者がその旧領をドイツの一般的な経済・文化水準に平均化する事業を先へと押し進め継続することのできた基礎が創出されたということです。ブランデンブルク・プロイセンに対しても、バーゼルおよびスイス経済史の巨匠Traugott Geeringがドイツ語が話されるすべての国々について述べた次の言葉が確認されます²⁵⁾。すなわち「近代工業は死滅しつつある経済形態に対する勝利の歩みを、南もしくは西からの信仰の亡命者がより高い経済的文化および生産と販売をすでに資本主義的に整序した経営形態をもって侵入した瞬間にはじめて開始している」と²⁸⁾。

我々は30年戦争後のドイツ経済の復興の門口に至るところ、どこでもプロテスタント移民者が立っているのを認めるのですが、その通りであることは、実際、この復興と近代的経済生活の展開に際して、ドイツのプロテスタントの部分に指導的役割が帰せられるという影響を及ぼしました。このことは政治史にとってもきわめて重要な意味をもつことになりました。ドイツのプロテスタントの部分において、ルター派の職業観念の精神的基礎およびカルヴァンの教説におけるその完成の上に、近代ブルジョア的資本主義はまっさきにドイツで発展したのです。カトリックの人口の部分は—このことはカトリックの側自身によってしばしば十分に確証され、遺憾とされてきました。19世紀末まで経済の極め

てのろのろとした発展を経験してきました。今日では両方の信仰の指導的な企業家層におけるその精神的な差異は相殺され、中流および下層においてはおそらくまだ完全に消えたとは言いきれないでしょう。

Friedrich Loofs²⁹⁾が学長就任に際して、この立場から「中世および近世に対するルターの地位」について講演された時²⁶⁾、彼は「宗教的理念は決して世界文化の直接的に作用する要因たりえないし、もしくはたろうとは思わない」という考えを表明しました。「それは種々様々な文化的要因の連動し影響しあうなかで阻止的に、自由放任的に、促進的に作用する」この命題はわれわれの論述に明確な指針と考えられうるでありましょう。ただしこの命題は、われわれの取扱っている問題に関しては、ドイツの経済生活に宗教改革者の教説が及ぼしたもつれからみあった小径をわれわれが跡づけたのちにおいて、はじめて、十分に理解されるでありましょう。たしかにそれは意欲された作用ではありませんでした。が、それゆえにこの作用は重要な意味をもっておりました。同時にまさしく意欲されていないというこの点において、宗教改革によって解き放たれた精神的運動の全体性と多方面性の証明でありました。社会経済学者と経済史家が宗教改革の祝祭に際して、1度、宗教改革の影響のこの側面を強調しようとするならば、この点に是認があるといえましょう。



フリードリヒ・ローフス

訳注

- [1] マックス・ヴェーバー (Weber, Max 1864-1920) ドイツの歴史・社会学者。彼の研究領域は社会経済史、社会学、政治学、法学、宗教学ほかにわたっている。近代資本主義の精神とプロテスタンティズムの倫理との因果関係を捉えようとしている。
- [2] トーマス・フォン・アキーノ (Thomas Aquinas 1225?-74) ヨーロッパ中世の哲学者・

神学者。

神の秩序（神の摂理）の流出すなわち分業に基づく人間の経済活動（世俗的秩序）、経済生産性の身分的秩序を肯定し、欲求充足、直接的取引を認める。

- [3] イエス・ベン・シラ（Jesus Ben Sira 前2世紀）旧約外典のひとつ『ベン・シラの知恵』の著者。前190－前180年頃に書かれた全51章から成る外典中最大の書。『ソロモンの知恵』と共に知恵文学の傑作。当時のユダヤ人の生活と思考を知る上で貴重。ここでオバンが引用している箇所は未確認であるが。
- [4] ドゥンス・スコトゥス（Duns Scotus Johannes 1264-1308）
中世後期の代表的イギリスのスコラ哲学者、神学者。スコットランドのマックストンに生まれ、1278年にフランシスコ会に入会。1291年司祭に叙階。オックスフォード、パリ大学で学ぶ。スコトゥスの思想はフランシスコ会の伝統を受け継いでアウグスティヌス主義に立脚しつつ、アリストテレスの考えを受容。スコラ哲学からルネサンスへの道を開く契機となる。
- [5] スコトゥス主義（Scotismus）ドゥンス・スコトゥスによって展開され、中世後期に特にフランシスコ会の神学者たちによって継承発展された哲学的・神学思想。哲学と神学との根本的調和の確信を打破するなど、中世スコラ学の根本命題を覆してスコラ学の崩壊を促した。スコラ学および宗教改革研究にとって重要な思想。
- [6] スコラ学（Scholastik）中世ヨーロッパの教会・修道院附属の学校や大学、すなわちスコラ（schola）で教師たちが成し遂げた学問。多様な領域にわたるが人文科学と神学が中心である。聖書の啓示の理性的弁償、その方法論は講読・討論そしてそれを支える弁証法でアリストテレス的論証を採用する。
- [7] 寄進の遺言 在世中の経済活動（良心に反して行った罪）の許しの保証。
- [8] エラスムス（Erasmus, Desiderius 1469-1536）オランダ出身の人文主義者。スコラ学の方法論に対して批判。1516年に最初のギリシア語新約聖書を刊行し〈源泉へ戻れと〉という人文主義の精神の具体化でルター、ツヴィングリらの宗教改革に大きな刺激を与える。のちに宗教改革が起こるとヨーロッパ統合の崩壊を恐れて、ルター批判を行う。
- [9] フッテン（Hutten, Ulrich von 1488-1523）ドイツの人文主義者。フランケン（フランク）の騎士の家の生まれ。1514年頃にエラスムスと出会い道徳的教会改革を宣伝しローマ教皇批判を強める。チューリヒのツヴィングリのもとでエラスムスの反ルター・反宗教改革を批判。
- [10] ルター（Luther, Martin 1483-1546）ドイツの宗教改革者。アイスレーベンで生まれ、マンズフェルトで育つ。マクデブルク、アイゼナハで学校教育を受ける。1501年エアフルト大学入学し法学を学ぼうとするが、後にアウグスティヌス隠修道会に入る。1507年司祭、1511年ヴィッテンベルクに移り、翌年に神学博士、教授となる。1517年10月31日《95箇条》を掲示。
- [11] ルターの経済思想について
トマス主義と相当程度まで一致：伝統主義的欲求充足、自足的都市経済の愛好、商業と商人への不信、利子と高利の否認。
トマス主義と相違点：職業観念 聖職階級を否認して世俗的職業を評価
信仰の証しとしての職業労働 托鉢→就職(救貧問題)
しかし、彼の新しい職業観念は十分な効果をあげなかった。
その理由としては、

- (1) Luthertumの支配地域の経済的後進性
 - (2) 晩年のルターの伝統的・保守的な回帰
 - (3) 教説の神秘化・内面化→職業労働（経済生活）を厳格な規律によって統制せず領邦国家の手にゆだねた。すなわち領邦教会制である。
- [12] カルヴァン（Calvin, Jan 1509-1564）フランスの宗教改革者。1533年に回心を経験し、パリからバーゼルへ。1536年、バーゼルで『キリスト教綱要』を著しジュネーヴで宗教改革を行う。
 - [13] グロティウス（Grotius, Hugo 1583-1645）オランダの法学者。宗教的、政治的理由でフランスへ亡命。『戦争と平和の法について』（1625年）で国際法を基礎づけ国際法学親と称される。
 - [14] サルマシウス（Salmasius, Claudius 1588-1653）フランスのユグノー派の古典学者パリで古典学を修行中にカルヴァン派に改宗。著作は神学、法律、軍事など多岐に及ぶ。
 - [15] 予定説（Prädestination）キリスト教の神学において、人間は救われるか滅びるかあらかじめ神の意志によって定められていて、人間の意志や努力によるのではなく、ただ神の哀れみによるのだとする説。
 - [16] ベザ（Beza, Theodor 1519-1605）フランスの改革派神学者。1548年ジュネーヴへ赴き大学教授、著作活動しながらカルヴァンの協力者、後継者となる。著書に『カルヴァン伝』（1563年）ほか多岐にわたる。
 - [17] クェーカー キリスト教プロテスタントの一派。フレンド派 Society of Friendの別名。神の言葉に震えると噂されたことに由来する。1650年頃にフオックス（Fox, George 1624-1691）がイギリスで創始。アメリカではウィリアム・ペン（Penn, William 1644-1718）がクェーカーの教義を広める。絶対平和主義の立場をとる。
 - [18] ヴッパータールの敬虔派 これについては、村山聡「ヴッパータール（ウンター・バルメン）における地域信条と社会構成（1816年）」（『三田学会雑誌』1989年第81巻4号、629-649頁）という日本での先駆的な研究があることを最近知った。「ウェーバー・テーゼが必ずしも正当に取り上げられないのは、まずは、その一般史あるいは世界史的射程とミクロ的な地域史研究とを接合する上での方法的困難さに原因がある」とし、「キリスト教『信条』の社会的影響力における『地域性』」に村山は着目している（同論文88頁）。後に村山聡著『近世ヨーロッパ地域史論』法律文化社1995年に所収。
 - [19] ヘルンフト信団（Herrnhut, Herrnhuter）15世紀後半から16世紀にかけて、フス派から出たボヘミア兄弟団の直系の一派に聖書のみに基づく信仰と実践の共同体としてカトリック教会の圧迫に耐えながらボヘミア、モラヴィアに発展したモラヴィア兄弟団がある。18世紀にザクセンの貴族で熱心なルター派敬虔主義者のツィンツェンドルフの保護を受け、彼が購入した土地に、1722年にヘルンフト〈主の守り〉を意味するセツルメントを建て、1727年にはモラヴィア教会を建設し、ツィンツェンドルフがその監督となった。教育に熱心、現世的な生活を離れ、聖書のみに基づいてキリスト教に帰り、厳重な信仰規律をもって日常生活の中にキリスト信徒の交わりを実現しようとした。
 - [20] ナントの勅令（L'Édit de Nantes）フランス王アンリ4世が1598年にナントで発布した勅令。フランスの新教徒ユグノーに信仰の自由を認めたので、これによって宗教戦争は決着した。
 - [21] ユグノー（Huguenot）16～18世紀フランスのカルヴァン派新教徒の通称。政府の弾圧

や旧教徒との衝突の結果、ユグノー戦争（1562～98年前後8回）を引き起こした。1598年のナントの勅令で信仰の自由が認められた。1685年のルイ14世の勅令廃止により新大陸を含むヨーロッパ各国へ亡命。

- [22] フリスラント（Friesland）オランダ北部の州。西フリージア諸島の対岸地帯を占め、低湿地が多い。主産業は農牧業で。特に良質な乳牛で有名。州都は商工業都市レーワルデン。16～17世紀は金・銀細工が有名。
- [23] アルバ公（Fernando Álvarez de Toredó, Duque de Alba 1507-1582）スペインの軍人、政治家。スペイン王カルロス1世（ドイツ皇帝カール5世）に重く用いられ、シュマルカルデン戦争でプロテスタント諸侯軍を大破（1547年）。カール5世退位後はフェリペ2世によって1567年ネーデルラント総督になり『血の会議』を設定してプロテスタント諸派と結んだ独立運動を容赦なく弾圧した。
- [24] 「信仰追放（Glaubensverfolgungen）によって制約された亡命者都市の類型（Type der Flüchtlingsstadt）は1700年頃によくこの頂点に達した。」（Handbuch der Deutschen Wirtschaftsfts- und Sozialgeschichte, S.481）
- [25] メノニート（Mennonites）16世紀オランダに形成された再洗礼派の一派。ツヴィングリ左派のスイス兄弟団に端を発する。1525年同派から分離。後にオランダに移住してフリースラントのヴィトマルスム生まれの創立者、メノー・シモンズ（Simons, Menno 1496-1561）を指導者とした。徹底的無抵抗主義、絶対平和主義の立場をとる。
- [26] ロカルナ人 亡命当時、ロカルノは、スイス盟約者団（ウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデン、ルツェルン、チューリヒ、グラルース、ツーク、ベルン、フリブール、ソロトゥルン、バーゼル、シャフハウゼンの「一二邦同盟」）が1512年にパヴィア戦役によってフランス軍をロンバルディーア平原から駆逐し、ミラノを征服することによって、ドモ・ドッソーラ、ルガーノ、メンドリシオ、キャヴェンナとともにミラノ公国から得た「共同支配地」Die gemeinen Herrschaften のひとつであった。1530年頃後半からロカルノでの改革思想が徐々に芽生え、1555年頃には亡命への機運が高まったと考えられる。
- [27] ソロモン ソロモン王 古代イスラエル第三代の王（在位前961-922）。ダビデの子。彼の治世中に王国の隆盛は頂点に達した。「ソロモンの知恵」と言われるように機知に富んだ王であった。
- [28] 亡命者の移住の流れをここで概括すると以下になるであろう。
 - (1) ライン下流域のプロテスタント領邦主としてスペイン領ネーデルラントから Jülich, クレーフェ公国（Cleve 含む Wesel）、メールス伯領（Mörs 含む Krefeld）、Berg へ。
 - (2) ライン中流、マイン下流域 ネーデルラントおよび、北フランス、東フランスから。Kur-Pfalz（含む）、Hanau 伯領、伯領 Nassau, Hessen-Kassel, Frankhurl am Main, Köln, Aachen へ。
 - (3) スイスのプロテスタント諸州と諸都市 南フランス、イタリアからジュネーブ、チューリヒ、バーゼルへ。
- [29] フリードリヒ・ローフス（Loofs, Friedrich 1858-1928）ドイツのルター派の教会史家。ヒルデスハイム生まれ。ライプツィヒ、テュービンゲン、ゲッティンゲンの大学で神学を学ぶ。ライプツィヒでは A. ハルナックに、ゲッティンゲンでは A. リッチェルに学ん

でいる。1881年ライプツィヒ大学で博士号を取得。1882年ライプツィヒ大学、87年ハレ大学員外教授、88年からハレ大学教会史正教授。『教理史入門』（1889年、1959年）、『教会史要論』（1901年、1910年）ほか多数の著作物がある。また1886年には、“Die Christliche Welt” 誌の創刊にも密接に関わっている。

* 尚、訳注作成については主題別レファレンスブックを利用。

聖書語句については、『聖書 新共同訳』（日本聖書協会1989年）に従った。

原注

- 1) この関連については、先行研究がある。なかんずく E. Gothein は “Wirtschaftsgeschichte des Schwarzwaldes” I, S. 674: では「ヨーロッパのいかなる国においてであれ、資本主義的發展の跡を辿る者の胸には、つねに、カルヴィニストのディアスポラ（散住）が同時に資本主義經濟の育成所である、という同一の事実が執拗に迫ってくる。」と述べている。
- 2) Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik, Bd. XX, XXI, 1904, 1905. 今現在ではラッハフアールへの反批判は (Archiv XXX und XXXI, 1910) in M. Weber, Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie, Bd. I, Tübingen 1920. の “Die protestantischen Sekten und der Geist des Kapitalismus” においてもなされている。私は以下では “宗教社会学” の記述を引用する。
- 3) ほかに代わりうる神学的側面からの称賛に値する論集として: K. Holl, Gesammelte Aufsätze zur Kirchengeschichte I, 1921, S. 387. ホールは拒絶しているのだが、カルヴィニズムの精神から資本主義の精神が生じたという、マックス ヴェーバーの有名な命題、私には重大な一面性は論証されたように思われる。また、Holl の der Festgabe für Karl Müller, Tübingen 1922, S. 196 A. をも参照すること。
- 4) 以下の教会經濟倫理の記述においてなかんずく M. Weber の上述の引用した箇所、さらに E. Troeltsch, Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen, Tübingen 1912. 今現在では優れたかつ総括である G. Wünsch, Evangelische Wirtschaftsethik, Tübingen 1937. 私は一般的に個々の節を引用することを控えるがトーマス主義については詳細に紹介されている論説 “Thomas von Aquino” und “Thomistische Gesellschaftslehre” im Handwörterbuch der Staatswissenschaften, 4. Auflage, mit Literaturangaben.
- 5) 後期スコラ哲学の經濟學の發展については: Edmund Schreiber, Die volkswirtschaftlichen Ansichten der Scholasitik seit Thomas von Aquin (Beiträge zur Geschichte Nationalökonomie, herausgegeben von Karl Diehl Heft I), Jena 1913. Duns Scotus の詳細については: G. Brodnitz, Englische Wirtschaftsgeschichte, 1918, S. 297 ff.
- 6) 同様に宗教改革の經濟上の教義について、また經濟上の環境（周囲の世界）については、G. Schmoller, Zur Geschichte der nationalökonomischen Ansichten in Deutschland während der Reformationsperiode. Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft XVI, 1860. から 教わることが多い。Wiskemann, Darstellung der in Deutschland zur Zeit der Reformation herrschenden nationalökonomischen Ansichten, Leipzig 1861. Frank G. Ward, Darstellung und Würdigung der Ansichten Luthers vom Staate und seinen wirtschaftlichen Aufgaben (Hallische nationalökonomische Abhandlungen, Bd. 21), Jena

1898. 今現在、この問題の補完しうる大いに注目に値する論文については、R. Häpke, Der nationalwirtschaftliche Gedanke in Deutschland zur Reformationzeit. Historische Zeitschrift, Bd. 134, 1926. などがある。
- 7) ルターの時代のヴィテンベルクについては、Edith Eschenhagen, Beiträge zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte der Stadt Wittenberg in der Reformationzeit. Rechts- und staatswissenschaftliche Dissertation Halle, 1927. ルターの環境からの影響の程度については様々な見解がある。ホールの見解は、Gesammelte Aufsätze zur Kirchengeschichte, Bd. I, S. 382 で環境を過大評価しているが、私自身、経済史家としてはその見解には疑念があるので賛成はできない。
 - 8) 上述の文献以外に、私はなканずく K. Eger のルターについての著作 Luthers Anschauung vom Beruf (Gießen 1900) に多くを負っている。
 - 9) 引用 Eger a.a.O. S. 115.
 - 10) Holl, Die Frage der Zinsnehmens und Wuchers in der reformierten Kirche, Festgabe für Karl Müller, Tübingen 1922, S. 178ff. カルヴァンの心的態度の決定的な点は、利子を取ることが必ずしも神によって禁じられていないという彼の証明でした。しかし、より重要なのは、アリストテレス学派の貨幣は不毛であるという見解についてのカルヴァンの反論だった。これは経済的利益でもありました。したがって、利子禁止の経済的正当性は根底から取り除かれたのです。
 - 11) Weber S. 115.
 - 12) Gothein a.a.O.
 - 13) ヘルムート派 (信団) については、私のゼミナールの成果であるが Herbert Hammer と Abraham Dürninger の研究, Ein Herrnhuter Wirtschaftsmensch des 18. Jahrhunderts, Berlin, Furche-Verlag 1925 そして Uttendörfer の二つの研究 Alt-Herrnhut, Wirtschaftsgeschichte und Religionssoziologie Herrhuts während seiner ersten zwanzig Jahre (1722-42). Herrnhuts 1925 と Wirtschaftsgeist und Wirtschaftsorganisation Herrnhuts und der Büdergemeinde von 1743 bis zum Ende des Jahrhunderts. Herrhut 1926. Die wirtschaftliche Seite Tätigkeit A.H. Franckes については残念ながら十分ではない。
 - 14) Troeltsch, Soziallehren, S. 716. Holl, Ges. Aufsätze I, S. 387.
 - 15) 特に、ポーランドからの移民は、18 世紀にドイツの職人をブランデンブルクプロイセンに連れ戻しました。17 世紀前半のベーメン、特に Öberlausitz で家庭織工の数を増加させ、間接的に農村の家内工業の発展を促しました。後半の大勢のプロテスタントの移民は、ザルツブルクに農民的な要素だけを導いている。
 - 16) 総括的な論説はまだ十分ではありませんが、大いに学ぶべき優れた考察は様々な純粋な地方史の文献に認めることができる。
 - 17) スイスについては、Tr. Geering "Handel und Industrie der Stadt Basel" 1860 1886 und "Grundzüge einer schweizerischen Wirtschaftsgeschichte" (Beiträge zur Schweizerischen Wirtschaftskunde, 1. Heft) Bern, 1912. 更に Maliniak, Die Entstehung der Exportindustrie und des Unternehmerstandes in Zurich im XVI. und XVII. Jahrhundert (Zürcher volkswirtschaftliche Studien, 2. Heft) Zürich und Leipzig 1913. を参照のこと。
 - 18) 16 世紀以来ベルク公爵領に住んでいたフォン・デア・ライエン家は 1668 年にはじめにクレフェルトに移住した。

- 19) ゲラ・グライッアの織織物工業については、トゥルネー出身の Nikolaus de Smit が決定的な立役者である (Finckenwirth, Urkundliche Geschichte der Gera-Greizer Wollwarenindustrie von 1572 bis zur Gegenwart, Diss. Leipzig 1910)。E. Kroker in Quellen zur Geschichte Leipzigs, Heft 2 und Gerhard Fischer, Aus zwei Jahrhunderten Leipziger Handelsgeschichte, Leipzig 1930. も参照のこと。毛織物工業では、移民は厚手の毛織物から薄手の毛織物との混紡織物への決定的な移行をする。カトリック教徒の国々でさえ、織物製作は至るところで彼らにさかのぼる。
- 20) フランクフルトについては、A. Dietz, Frankfurter Handelsgeschichte, 5 Bände, 1910-25. の大著によって非常によく知ることができる。また G. Witzel, Gewerbegeschichtliche Studien zur niederländischen Einwanderung in Deutschland im 16. Jahrhundert. Westdeutsche Zeitschrift XXIX. も参照。
- 21) ライプツィヒについては今現在では、G. Fischer の das aus einer Hallischen Dissertation herausgewachsene oben zitierte Buch von G. Fischer, Aus zwei Jahrhunderten Leipziger Handelsgeschichte, Leipzig 1930. を参照。
- 22) マグデブルクについてはトーリンのよく知られた古典的な仕事の他に今現在では Scholze, Die volkswirtschaftliche Bedeutung des Refuge für die Stadt Magdeburg in "Magdeburgs Wirtschaftsleben in der Vergangenheit", Bd. I, 1925. ハレについては Paur Kilian, Die hallische Wollweberei. Ungedruckte Hallische rechts- und staatswissenschaftliche Dissertation 1923. Fr. Lehne. Die französische Handschuhmacherei in Halle a.S. Hallische rechts- und staatswissenschaftliche Dissertation 1926. これと他の総括的な研究は Ernst Heinecke, Die wirtschaftliche Entwicklung der Stadt Halle unter brandenburgpreußischer Wirtschaftspolitik 1680-1806 (Beiträge zur mitteldeutschen Wirtschaftsgeschichte und Wirtschaftskunde, herausgegeben von G. Aubin, Heft 10) Halberstadt 1929.
- 23) Kilian a.a.O. S. 66.
- 24) G. Schanz, Zur Geschichte der Colonisation und Industrie in Franken, Erlangen 1884.
- 25) Geering, Grundzüge einer schweizerischen Wirtschaftsgeschichte, Bern 1912, S. 7. die Anmerkung 1 zitierte Äußerung E. Gothein. をも参照。
- 26) "Deutsche evangelische Blätter" 1907, Heft 8.

著者紹介

Aubin, Gustav Karl Wilhelm,

国民経済学者、経済史家 *13.3.1881 Reichenberg[Böhmen]- † 15.9.1938 München.

Valenciennes 出身のユグノー亡命家族の出。1599 年以来フランクフルト アム マインに旅館および商人として定住している。

彼の父 Carl Alexander Aubin (1850-1920) は Reichenberg の Textilfabrikant, 母 Anna Schirmer (1856-1935) は Reichenberg の商人および市長の Gustav Schirmer (1821-1893) と Marie Schmidt (1820-1887) の娘。父方の祖父 Philipp William Aubin (1809-1876) はベルリンの Fabrikant、母方の祖父は Sophie Linnemann (1820-1905)。

父の事業が成功したおかげで裕福な上流階級の家でオバーンと彼の 4 人の兄弟姉妹は大切

に育てられた。弟にハンブルク大学歴史学教授 Hermann Aubin (1885-1969)がいる。

1908年1月30日、フライブルクの銀行家 Julius Mez の娘 Elisabeth Mez(*1885)と結婚、子供なし。

彼は、Reichenberg の Staatsgymnasium で古典教育を学び、修了後、1900年から1907年にかけてベルリン、ライプチヒ、フライブルク、ミュンヘンの各大学で法学、国民経済学と歴史学を学んでいる。

1911年8月20日に Erlangen 大学に国民経済学の私講師として就任。

1912年6月22日に Halle-Wittenberg 大学に国民経済学の私講師として就任。

1919年10月1日にハレ大学で経済国家学正教授

1934年 Göttingen 大学で経済国家学正教授

経済史家として、特に東部ドイツの農地制度の発達史および資本主義初期（16、17世紀）の工業史研究に大いに寄与。Aubin, G. und Kunze, A. *Leinenerzeugung und Leinenabsatz im ostlichen Mitteldeutschland zur Zeit der Zunftkaufe. Ein Beitrag zur industriellen Kolonisation des deutschen Ostens* (Stuttgart, 1940)は、注目に値する。特に集合的定期取引契約 (Lieferungsvertrag) ・ [Zunftkauf ツンフト売買契約] を発見。東部ドイツ麻工業における問屋制の発展に対するその重要性を死後出版された大著で述べた。

主要著作

- (1) Die Entwicklung der richterlichen Unabhängigkeit im neuesten deutschen und österreichischen Rechte, 1905.
- (2) Zur Geschichte des gutsherrlich-bäuerlichen Verhältnisse in Ostpreussen von der Gründung des Ordensstaates bis zur Steinschen Reform, 1911.
- (3) Die Leineweberzechen in Zittau, Bautzen und Görlitz : Darstellung und Urkunden, 1915.
- (4) Deutsch-Österreich, Auslandstudien der Universität Halle-Wittenberg, II. Reihe, Heft 4, Halle 1919.
- (5) Aus der Frühzeit des deutschen Kapitalismus, 1921.
- (6) Entwicklung und Bedeutung der mitteldeutschen Industrie : ein Vortrag, 1924.
- (7) Der Deutsche und das Rheingebiet, 1926.
- (8) Die Wirtschaftsnot des deutschen Ostens : Rede gehalten beim Antritt des Rektorates der Vereinigten Friedrichs-Universität Halle-Wittenberg am 12. Juli 1930, 1930.
- (9) Aus der Entstehungsgeschichte der nordböhmischen Industrie, 1937.